

「夫婦愛和」こそ子育ての礎いしずえ上うえ廣ひろ哲てつ治じ

桜の咲く頃になると、進学や就職の結果を報告してくださる手紙をたくさんいただきます。苦しい受験勉強を経て志望校に進むことができた。厳しい就職活動を経て希望する会社に入ることができた。手紙には、苦勞の末に勝ち取った嬉しい結果と、新しい環境で生きる決意が書きとめられています。

その一方、不合格や不採用になった方からも手紙をいただくことがあります。無念な気持ちや悔恨の入り混じった苦しい胸の内がつづらられています。それでも、最後はその困難を真正面から受け容れ、それに立ち向かい、乗り越えていこうという「現実大肯定」の実践を誓う言葉で力強く結ばれています。人の真価は苦難に遭ったときに表れるといいますが、このようなお便りからも人間としての成長を感じ取ることができました。

いかなる門出かどでであつても、若い方々の成長には目をみはるばかりです。曹洞宗の開祖・道元どうげん禪師に、「花の色いろろ美なりと云へども独り開ひらくくるにあらず、春風を得て開ひらくるなり」(『正法眼藏隨聞記』)という言葉があります。春になると花が一斉に咲くけれど、どの花も自分だけの力で咲いたのではない、春の

暖かな日差しや豊かな土壌などの天地自然の恵みのおかげで、春が来て無事に花開くことができるのだ、自分を育んでくれた見えない力を忘れてはならないということでしょう。

若い方々の成長の陰には、それを育んだ家庭があつたのです。もちろん愛和した仕合わせな家庭です。子どもは仕合わせな家庭のなかでのびのびと育ち、さまざまな力をつけて成長していきます。

世間では、子どもを育てるのは親の力だといわれます。親がきちんと指導し、社会常識を身につけさせたから、子どもはさまざまな能力を身につけることができるのだというのです。確かに一面ではその通りなのですが、わが会では、親の指導やしつけ以上に親の行動、生き方から子どもは多くを学ぶと考えます。いくら口で「勉強をなさい」「社会ルールを守りなさい」と言い聞かせても、親自身が本も読まず、例えば交通ルールを守らなかつたら、子どもは勉強もしないでしょうし、社会ルールも守らないでしょう。

このように、子どもは親の言葉だけではなく、親の行動を見て育つのですから、家族関係が不安定で、諍いさかいの多い家庭ではのびのびと成長することができません。成長するためには、愛和した仕合わせな家庭が必要なのです。

では、どのようにすれば愛和した家庭を築くことができるのでしょうか。

名誉会長は、『実践倫理講座(人の巻) 人生を輝かす』のなかで次のように説かれています。

「家庭の愛和を実現する主役は誰でしょうか。もちろんそれは(夫婦)です。夫婦こそ家族の出発点であり、(夫婦愛和)が実現してこそ、家庭に愛和が満ちるのです」

良好な夫婦関係こそが家庭の仕合わせを築く柱であるというのです。

ところが実際には、一度も喧嘩をしたことのない夫婦は稀です。現実には多くの夫婦が、些細なことで諍いを起こしているのではないのでしょうか。しかも、時には子どものいる前で。

カウンセラーとして数多くの臨床経験をもつ臨床心理士の金盛浦子さんは、たかが夫婦喧嘩ぐらいと軽く考えてはいけなさと注意を喚起します。子どもの成育に深刻な影響を与える場合があるというのです。まだ幼いからわからないだろうと、子どもの前で喧嘩をすると、そのときの親の声の調子、表情の変化を感じ取って子どもは強い恐怖感を抱くといいます。この恐怖感は「今の自分ではだめなんだ」という劣等感につながります。こうした感情を日常的に抱くようになると、「自分が悪い子だからお父さんとお母さんは喧嘩ばかりするのだ」「私なんかいないほうがいい。そうすればお父さんとお母さんは仲良くなれるんだから……」と考えるようになります。そして、自分をネガティブ（否定的）な存在にとらえ、成長しても自己肯定感を得ることができません。自立心や自信も生まれず、さらにこれが進めば自傷行為や摂食障害に陥る可能性もあるといえます。

このことから、夫婦愛和が子どもの成長にとつていかに大切かがよくわかりただけでしよう。いや、「夫婦愛和」こそ子育ての礎なのです。冒頭でご紹介した若い方々が、未来に向かって力強く一歩を踏み出す力は、夫婦が愛和した仕合わせな家庭によって育まれたのです。

鹿児島県の離島に住む南由美さんがお書きになっている「幸せな夫婦・家庭であるために」と題されたブログに、長男が小学二年のときに書いた「ぼくのたからもの」と題された作文があります。この作文は、「町の審査で特選に選ばれ、その中からまた選抜で、奄美大島のコンクールに出展されることになった」と南さんは書いています。

ある日、南さんはくも膜下出血で倒れ、自衛隊のヘリコプターで住んでいる島から沖縄の病院に運ばれます。手術は無事に終わり、リハビリを終えて、退院することができました。

作文はその顛末を書いたもので、次のようにつづられています。

「お母さんはまだびょうきがぜんぶなおったわけではないです。でも、とてもしあわせそうに見えて、ぼくまでしあわせな気もちになれます。……さみしいことやかなしいこともいっぱいあったけれど、家ぞく4人でちからをあわせたから、のりこえることができました」

突然、困難な事態が起きると、家族は一層絆を強くして、その困難に立ち向かいます。その家族の絆があるからこそ子どもは辛い現実にも正面から向き合うことができ、それを糧に成長していくのです。

夫婦愛和は家庭の仕合わせの柱であり、子育ての礎であると申しました。子どもを健やかに育てるために夫婦は仲良くなければなりません。しかし、実際において夫婦には少なからず諍いがつきものであるベテラン会友さんが教えてくださいました。「いくら仲のいい夫婦でも、意見の対立や不満はあるんです。わが会の会友さんたちが素晴らしいのは、それを乗り越えようとする意志と実践力が備わっているからです」。多少の諍いがあっても夫婦で共にそれを乗り越えて理解し合う、この意志と実践力が、夫婦愛和の要諦ではないでしょうか。

さて、今月の実践課題です。夫婦は互いに自分のことをわかってもらえない不満を抱えてしまうものです。でも、相手にわかってほしいのなら、まず先に相手を理解しなければなりません。あなたは伴侶の声にきちんと耳を傾けているでしょうか。昨年の春の大会で申し上げたとおり、「聞くこと」「受け容れること」「共感すること」、この実践こそが夫婦愛和の第一歩となるのです。